

「根を失つた人々」に就いて

川 西 良 三

この長編の作者モーリス・バレス *Maurice Barres* は第一次世界大戦後も文筆活動をつゞけてはゐたが、その最も活躍した時期は二十世紀關頭から大戦までの間にある。バレスとほぼ同時代同年輩の文學者として特に著名なのはアナートル・フランス、ピエール・ロテイ、ポール・ブルジェ、アンドレ・ジード等であつた。この中、ジードの名の揚がつたのはかなり後年のことに屬する。ジードはその四十歳以後やうやくにして廣く文壇に知られるやうになり、やがてその崇拜者も數を増し、第一次大戦後は遼原の火のやうにジード熱が擴がつたのである。このジード熱がたゞに佛國にとゞまらず世界各國に擴がつたことは周知のことと思ふ。従つて、ジードは戦後の作家だと言へる。

歐洲大戦が終つて直後の文學界の要求は全く「純文學的」であつた。プルースト、ジードと最も高い二つの名によつて代表されるやうに、當時の人心は現實の政治經濟社會から遊離した全く純文學的な夢と刺戟とを渴望した。これは一つの戦後の現象と言へるかも知れぬ。人々の心は切迫した現實、重苦しい經濟政治の壓力に耐えかねて、むしろ甘美な慰安と詩文的な夢を追求した。人々は戦争を忘れようと慾してゐた。すくなくとも、生々しい戦争の記憶を文學にとりあげることがあまり好まなかつた。あれだけの凄惨な大戦争がその直後の文學にほとんど扱はれようとしてゐないのは奇異な成りゆきであつた。

そこで、既成大家のブルジェの倫理的議論、バレスの政治的主張なども讀むにわづらはしいものとして人々はそれ

「根を失つた人々」に就いて

に背を向ける傾向にあつた。バレスなどもフランス青年の國民精神復興に盡した役割を全く終へてしまつた過去の人と見なされるやうになつた。アナトール・フランスですらも、人々はその後年の作品に政治的社會的問題のぎろんの多いに厭いた形であつて、むしろ、純粹な童心を唄つた回顧録や空想的世界を散歩する物語りなどの方が一般に歡迎された。

眼を佛國外に轉ずると、この傾向は一そう著しい。上記した第一次大戰前の四作家、ロティ、フランス、ブルジュ、バレス中、後の二者の名は日本の讀書層にはほとんど知られてゐない。しかし、「お菊さん」「氷島の漁夫」「ラマンチヨ」などの小説でジュール・ロティの名はよく親しまれてゐる。アナトール・フランスの名もまた世界的である。

ロティ、フランスの二人は、まづ何よりも個人主義者であつた。ロティは祖國が政治的に社會的にどういふ情勢にあるかなどについての關心を持たなかつた。彼は全くの個人主義者であり、異國情緒を夢幻的に追ひ、美しい陶醉にふけてゐた。アナトール・フランスは政治問題社會問題を多く論じたが、これとて重苦しい義務や責任を人の心に呼びおこすものではなかつた。彼は「ほゝえみをたゝへた皮肉」*L'ironie souriante*で社會の傳統や諸權威を諷刺し、その根柢を徐々にゆるがし崩す（ *saper*）のを旨とした。その本質は反社會的であり、徹底した個人主義者であつた。本來は趣味に生きるディレクタントであつた。そしてまた、個人的な趣味の世界をさまよひ歩く彼の文章が、その文體の流麗さとともに廣く愛好された結果になつてゐる。

ブルジュとバレスとはその後年に到達した結論に於て上の二人と對照をなしてゐる。まづブルジュはカトリック舊教と王政とがフランス國家の二大支柱であると考へ、文學もまたこの二つの理想に奉仕すべきであると思つた。この二つの光明に導かれてフランス社會が歩む時、佛國は強力になり社會も安泰になると考へた。フランスの經驗した二つの帝政（ナポレオン一世と三世）はいづれも悲劇的結果に終り、二つの共和政治も徒らに社會の混亂と無秩序とを招いてゐると彼は立證する。十九世紀の政治や文學に革命的な新思想が次々生ずる時代にあつて、ブルジュが一個の

反動主義者であつたことは確かであらう。反動と呼ばずとも、彼が舊秩序を重んずる保守主義者であつたことは明かである。ブルジェのごときは個人主義の名から全く遠い存在であつた。

これに比すれば、モリス・バレスは、まづロマンティックな個人主義者として出發した相違がある。バレスはまづ始めに「自我の崇拜」*Le culte du moi*をその目標として打ちたてた。これはむしろ「自我の發場」とでも言ふべきものであらう。ともすれば世紀末の宿命論や科學主義や厭世主義などから影響されて虚無的になりやすいのを排撃し、人間的個性を完全に發現させる……、かう言へばロマン主義復活の匂ひもするであらう。しかしながら、彼の思索が進むとともに、この「自我」といふものが既に、抽象的な、空に浮んだものではなくて、祖國の土、同胞、宗教、風俗傳統などに根ざした自我であることに氣がついた。かくなれば、自我を發場するといふことはその自我の根ざした祖國の傳統の上にさらに成長し活動することになる。こゝに於て、バレスは個人主義者から熱烈な國家主義者となつた。この變化のあらはれてきたのは彼の三十五歳前後に當る。虚無思想や、科學の影響による決定論の思潮や、耽美主義思想などが混沌と入りみだれ、青年たちが去就になやんでゐた十九世紀終末のことであり、歐洲大戰を十數年後に控へた運命的な時期であつたことにも意味があつた。

バレスの内心のこの革命的變化を劃したものが「民族の精力」*De l'Energie nationale*と呼ばれる長編敘事詩的小説の三部作で、その先頭を切るのはこの「根を失つた人々」(一八九七年)である。*Les Déracinés*(直譯すれば、根こぎにされた人々。)

以後のバレスの作品はすべてフランス國家主義の肯定であり、フランス社會の支柱たるカトリック舊教の擁護であつた。結論に於てはブルジェのそれと多くの相違はないが、ブルジェがどこまでも社會の秩序といふ見地から理論的に到達したのに反して、バレスは、批評家アルベール・チボデ等の指摘するごとく、「こちこちの國家主義者といふのでなくて、軟かい貝肉が堅い貝殻を分泌したやうな經過ででき上つた」愛國者であると言へる。(この見方は、京

大伊吹教授の所説に借用したことを申し添へておきたい。) 神経質で情熱的で狂亂的なロマンティストが、そしてまた初年の陰うつな複雑な懷疑主義者が、その肌合ひのまゝでこゝに一つの國士を形づくつた。

この「根を失つた人々」の中では、民族的傳統と郷土生活との根を失つたフランス青年層の病弊を論じ、その青年たちの人生失敗を描寫してゐる。フランス文學の中にかうした趣きのものがあるときいただけで、日本の讀者にはけいふんな面持ちをする人も多いであらうと想像する。それも無理からぬことである。「フランスは自由の國であり文學至上主義である」ときかされ、スタンダールやボードレールやジードのやうな作風のみがフランス文學であると考へてゐた人々には全く意外であらう。しかし、フランス文學を少しく全面的に見渡してみると意外でも何でもないと言へる。日本には、スタンダールからジードに到る流れの文學が特に多く輸入され翻譯され、よく知られるやうになつたといふだけのことである。

フランス文學の中には宗教その他の社會的傳統を堅持する保守的な文學の流れもまた、昔から斷えることがない。

「自由の國、文學至上主義の國」といふ名から日本人々が想像するやうなフランスは單に文學や映畫の上だけであらう。實際のフランスはかへつて、古色のたゞよつた安靜で保守的な社會であると言つてよい。このことは左リヨンの瀧澤氏が十數年前から次々と日本に送つた「フランス通信」などによつても或る方面の蒙を啓いてきてゐる。

アンドレ・ジードの教へは、一面から見れば、「脱出」*Evadion*の一語に要約される。國家も宗教も慣習も道德も、その他すべての社會的規制は人間性の眞實の發達を妨げるから、これらすべての拘束をのがれよといふにある。この教義は遠くスタンダール(1783—1842)の文學に流れを汲むものと思つてよい。ジードもまた小説作法ではスタンダールを唯一の師としたことを告白してゐる。スタンダールの文學は、傳統と慣習とを破り、狭い倫理を無視して乗り越える人間のエネルギーを崇拜した。平和で美しいレナル夫人を誘惑し征服し、彼の嵐の生活に巻きこみ、さらに無限に自己を社會に伸長させようとして、最後に斷頭臺の露と消えたジュリヤン・ソレル(小説「赤と黒」の主人公)

の物語りは有名である。そして、日本の讀書界もフランス文學の中の「背德者」(ジードの一小説の名。L'Immoraliste)の系列をむさぼり讀んだ。

有體に言へば、文學の本質も、むしろその邊りにあるかも知れない。文學と修身、文學と説教が同一でないことは自明である。平和な聖人や貞女ばかりが集つてゐたら文學の必要も少い。この濁世に諸々の人間が諸々の野心や煩惱をいだき、相争ふところに多くの文學の世界も生れた。しかしまた、社會の堅固な諸規制の中に、各人がそのあふるる生命力を、煩惱を、人間性を生かせようとしてゐる苦しみの描寫にも文學があると云へよう。フランスの社會が當今の日本よりも非自由的であり、若い人たちの結婚は大部分は兩親の意志により決定され、自由結婚の成立することなどは全體の數から見れば九牛の一毛にすぎないと云へば、フランスに對して一種の偏見を抱いてゐる人々は一驚するであらう。しかし、そのやうに意外に嚴重な拘束制約の存在する社會にゐて人間性の苦悶するところにこそ秀れた文學作品の發生する理由があるのだとも言へる。ジードの「せまき門」はそのやうな苦惱を作品のテーマにしてゐるものとも視られる。

上述の觀點からすれば、ブルジェもバレスもその後年になるにつれて、多少は非文藝的になつてゆく傾きがあつた。文章そのものも、バレスの初年の物狂ほしいロマンティストの調子は失はれないとするも、形の上からはますます直線的になつて行つた。後のバレスは一個の國家主義論者となり、ひたすらフランス青年の精神を振起しようとしたので、文學による行動 *action* の力をより效果的にする必要もあつて、文章は簡潔明瞭さを加へるにいたつた。初めの晦澁さに比すると、彼の文章は「徐々に脱皮して行つた」と言はれる。この反面に、彼の文章の滋味の失はれたのをなげく人も多い。

また、レジス・ミッシェも指摘してゐるやうに、「ピエール・ロティやアナトール・フランスの作品は遠く海を越えてアメリカでもアジアでも世界各國で讀まれてゐる。しかるに、ブルジェやバレスなどの大フランス主義者たちは

フランス文學を國境にとちこめた感がある。アメリカあたりでロティやフランスの小説の翻譯され賣れ行くおびたしい部數に較べると、ブルジェやバレスのものはまことに驚くほど少い。」との手痛い批評も生じてゐる。

廣く世界的に、人間性の共感に訴へるものがあるかどうかといふことは、文學の大きさもしくは優秀さを決める一つの標準であるにはちがひない。しかしまた、ブルジェやバレスのものが餘り讀まれないのはその他に二三の事情も存在する。まづ第一に、第一次大戰後の文學界が前記したやうな理由で、ブルジェやバレスのやうに眞向から政治社會の問題を論じたものを歓迎しなかつたのによる。第二に、バレスなどは現實の政治面にタッチした多くの問題をこまかく論じたので、その當時のフランス社會に特有な知識をもち合はさない外國の人々には興味薄となつた傾きがある。それでも、時代を超え得なかつたといふ點では、この二人の文學は大きさに於てすでに結論が出てしまつてゐると思へると思ふ。

こゝで、一應、「根を失つた人々」の概要をお傳へしたい。

主人公なるフランス東北境ロレーヌ州の七人の青年は、はじめは地方都市ナンシーのリセ（高等中學校）に學んでゐた。これらの青年は世紀末特有の思想的混亂と、第三共和國の缺陷の多い教育制度の下に成長してきた。その學校へ赴任してきたブテーユといふ教師はカント哲學者で、高遠なる理論と蒼白い智的情熱とで生徒たちを魅了し、その尊崇を一身に集めてゐた。バレスによれば、この人自身が一個の根なし草であつた。早くに両親を失ひ、大都市パリのアパートの一角で祖母一人に育てられ、高等師範學校（L'Ecole Normale Supérieure フランスで文科系では最も名譽の高い學校）を首席で卒業し、その経歴の光りで各地の學校をあちこちらと轉任し昇格して行つた人である。したがつて、ブテーユ先生の頭腦には理論としてたゞきこまれた學問があるだけで、社會とか歴史とかいふものも理智的に外部から眺めて把握されたものであつたと。

この人は成育期にある生徒たちに多大の感銘を與へたのであるが、彼が生徒たちに與へた指針は常に各人の郷土や

家族や歴史や父祖の職業などとは全く切りはなしたものであつた。ブテーユ先生は、一個のカント哲學者として、常に「かくあらねばならぬ」といふ規範命令を思索したが、このやうな思索に立脚して、彼は各生徒にその人柄を見て「かくあるべし」といふ *devoir*（責務）を訓へた。それによれば、或る者は官吏たるべく、或る者は學者たるべく、或る者は技師たるべく、或る者は政治家たるべく、そのためには、すべて都パリに上りそれの専門の學校に入つて勉學せねばならぬといふことになる。

こゝで問題となつてゐる七人の生徒は、ブテーユ先生の言に青年特有の野心をかき立てられ試験勉強をして、それぞれパリに出ることになつた。バレスによれば、つまり「根を引きぬかれた」のである。野心に刺戟されたが、競争心も虚榮心も手傳つた。郷里にゐて家業を繼ぎもしくは地味な立身をし、花のパリに遊學するのでないならば、赫々たる未來の希望にかぎやいて歩む他の友人たちに落伍する感じがしたのである。

このやうにして、「責務」を抽象的に打立て、郷里に於ける家族の傳統的立場による「責務」を無視するのは誤りであつたとバレスは言ふ。もつとも、フランスは人口不増加の國であつて、日本のやうに二男坊三男坊四男坊五男坊がそれ／＼郷家と別個に立身の途を探さねばならぬといふやうなのは事情を異にしたことも我々としては考慮に入れねばなるまい。このバレスの見解については、保守主義者ブルジェも同じ主張をしてゐる。彼の有名な *L'Étape* (1901年)。この題名はむしろ階程とでも譯した方が當るやうに思ふ。)に於ては、各人はその家族の社會的地位を、低いなれば低いなりに、一里程だけ前進させるために努力すべきであるとし、徒らにヒロイズムに驅られて現實の立地を忘れ理想に走り最後に失敗した一青年の物語りを記してゐる。

バレスのこの作の主人公たる七人の中には、その家族が地主であるものもあり、工業家もあり、商人もあり、農業者もあり、牧産者もあり、それ／＼郷土に深い根を下ろし、「責務」を抽象的に思索せずとも、現實の立地に手近に數多く見出され得た筈だとバレスは言ふ。

さらにまた、バレスには、新興ドイツの西進第一線たる彼の郷里ロレーヌ地方に於て、青年たちがフランスの根を深く下ろすことなく、次々に郷里を捨てるのを憂ひた政治的考慮があつたと言はれる。フランス東北部に「フランス的物質」la substance française が稀薄化し、ドイツ的要素が浸透してくるのを憂ひたのだ。これは、四面海で隣國と隔てられた島國日本では實感できない事柄のやうである。今、假りに、北海道とシベリヤ、九州と朝鮮とが陸地つづきである場合を考へてみれば、バレスの政治的憂慮の理由も理解されるであらう。

さて、パリに出た七青年がどういふ途をたどつたかを見るべきである。その名前を一々あげて説明するのはわづらはしいから、これを省略する。七人の中には學問研究に熱心な者、詩人的に生活圈を擴大してゆく者もあつたが、多くの青年たちのさまよひこんだ世界は學生街におびたゞしく増加してゐる酒場であつたといふ。「青年たちに課せられた生硬退屈な教場の授業が何に導くかを人々は問うてみる。すなはち、酒場に導くのである。酒場の中ではお話にならぬ、たなさがみなぎつてゐる。他の惡徳よりも何よりも、その汚濁は青年たちの心的衛生を害する。その世界には、眞の情熱もなく、眞の歡樂もなく、たゞ物憂い怠惰が充ちてゐるからだ。しかも、高等中學校時代の寄宿舍生活から解き放されたこれら若い大學生たちは、近代社會に同化する第一歩として、このやうな世界から入つてゆく。」と。學生街の一劃からフランス青年の精力は去脱され、「半男性」とでもいふべき存在が製造されてゆくとバレスは言ふ。このラテン街では、十九世紀末の學生たちは何をなすべきかを盛に議論したが、現實に行動の立地は見出せなかつたのが眞相であると。

かうした環境の中に、自然と悪い生活習慣の女たちとも結びつき、中には同棲生活に入る者もある。「青年たちの、殊に大都會に於ける、初期の青春時代はむしろ醜惡であるのが常だ。」と。そしてまた、「その光景は相ともに水に溺れゆく者たちの本能を示してゐる。社會の海原で、溺れるまいとして、泳ぎを知らぬ者たちがお互にしがみついてゐる姿だ。」と。バレスの呼び方はます／＼痛烈になつてゆく。學生酒場街に／＼してゐるのは、卒業後も歸國し

ない群をも合して、「學士のプロレタリア群」であると言ひ、「彼らは昇りゆく民衆ではなく、墮落してゆく貴族主義者である」と。さらにまた、「これら世紀末の學生の周圍には喧騒と雷同とのみがあつて、バルザックの作中の學生にみるやうな偉大な孤獨と靜寂とはなかつた」とも論じてゐる。

こゝで結論を急ぐと、この七人の中に大過なく學生生活を終へた者もあるが、一つの極端な例としてラカド Face-rot といふ青年がある。これは「根を失はされた」結果から、もつとも大きな人生の失敗にまで進んだ男であつた。ラカドはもと／＼ロレーヌ州の草深い農民の血筋で、むしろ鈍重な性分で、耕作にも耐える體軀を持つてゐたことは言ふまでもない。元來が精力的な人間であつたので、學問に専心するよりは實際の方面に友人と協力して何かの企業をしようと考えた。彼は、友人たちと共同の一つの理想をかけた新聞の發刊を思ひつゝいた。その創刊の資金を得ようとして、國もとの父に三萬フランの送金を依頼した。父親の考へとしては、息子は地方の小都市に歸つて着實な實務につく方がよいと思つてゐたので、「お前はバリではびた一文かせいでゐない。國ではちやうど某法律事務所に書記見習ひを求めてゐるから、これを機會に歸つてきた方がよい。」と切言した。息子はきかなかつた。父親はつひに折れて、「この金は送るが、今後はもう面倒を見ないから、獨立してやつてゆけ」と返答してきた。

資金ができて勇躍したラカドは、高校同窓の友人たちとともに、それ／＼の仕事的分擔して新聞の刊行にとりかゝつた。他の方面に實行の手がかりをもたない學士たちは、當時申し合はせたやうに出版事業に走り、紙の大浪費時代を現出したものであると。ジャーナリズムは學校出の青年たちのもつとも思ひつきやすい流行であるばかりでなく、「彼らにとつて、もつとも抵抗の少い線であつた。」と。實務の世界に訓練されて居らず、また「政治經濟の諸現實におそろしく無智な」青年たちの、いはば「烏合の衆」で思ひつゝいた刊行物が失敗の途をたどつたのに何のふしぎもない。はじめは無責任に雷同し賛成し、おだて／＼かゝつた友人たちも、ラカドの事業から俸給や原稿料を喰ふことをのみ考へてゐた者が多かつた。それで、支拂ひを期待し得なくなると段々と冷淡になつて行つた。新聞經營の實際に遠

いやうな夢物語を書くことのみに歡びを感じてゐる者もあつた。ラカドは忽ちにして苦境に陥つて行つた。

「ジャーナリズムは彼らにとつてもつとも抵抗の少い線」と言つたのについてはバレスは次のやうに説明してゐる。

「フランスの高等學校に於けるギリシャ・ラテンの古典語古典文學中心主義の教育は、青年たちをして、フランスの國民的紐帶を強めるべき農業工業交易などの生産的方面に適するやうにしないで、かへつてこれから引きはなす傾向を有する。リセに於ける青年たちは皆がバリの文筆家になるやうに教育されてゐるやうなものである。學校を出た彼らが知つてゐる技術は文章を書くといふことだけだと言つてよい。それでラカドの新聞刊行で彼らは生れて初めて文章を發表できる悦びに胸をおどらせてゐた。それは彼らとしての男性的發現の確證を意味し、永い間、物眞似させられてゐた彼らの最初の行動を意味した。」と。バレスがこのやうな結論に到達したことは、文學者として奇異の感を與へるが、この時代にはすでに彼が「政治の文學に對する優越」を信ずるに到つてゐたものと思へる。この「根を失つた人々」を轉機として、バレスはますます經世家の風格に進み、その情熱的な文章と華麗な比喩的表現以外には詩人的な香りは少くなつてゆくのである。バレスが、はじめはロレーヌ州から、次にはパリから立候補して、いづれも代議士に選ばれたことも人々の知るところだと思ふ。

そこで、バレスの作品全體の中では、最初の宿命論や懷疑主義の交錯する中に自我を確認してゆく過程の、すなはち「自我の崇拜」時代の文章の方が今でも外國でよく讀まれてゐる傾きがある。これはまた、批評家ストロウスキーの見解によれば、「後年の作品はフランスの特殊の時期、特殊の環境にしか妥當しないが、自我の崇拜の問題は世界各國のどの狀況に於ても妥當するからである。」と説明されてゐる。

こゝにまた、バレスが學校出の青年たちのたどる安易なコースをのみ極力攻撃してゐるやうに見えるのも、實はさうではない。バレス自身もまた、ナンシーの高等中學を卒業し、次いで法律學を修めて後、一八八三年にパリに出てはじめは若い評論雜誌に寄稿し協力し、やがて彼自身で *Taches d'Encre* (インクのしみ) といふ雜誌を創刊してゐ

る。この雜誌は、いはゆる三號雜誌とはならなかつたが、大差ないところ、四號で息を引きとつてゐる。刊行物としては明らかに失敗であつた。デラシネの作中にも、彼が自己の體驗を織込んでゐることは言ふまでもない。したがつて、この小説は一つにはバレスの豊かな自己批判のあらはれと見られてもよいと思ふ。

さてデラシネの主人公ラカドはこの苦境にも屈せず、しやにむに事業の挽回を計つた。もとく、ロレーヌ州の頑強な農夫の血潮が流れてゐるラカドであつたからだ。農夫や兵士にしたならば、すばらしい頑固さを示したのであらうと思はれるこの青年が、甲斐なき出版事業にもその持ち前のしぶとさを發揮したのである。資本家の出資に、政治家の援助に、友人の助力に、父親の再投資に、あらゆる方面の援けをさがし求めて彼は働きかけた。

しかし、政治や經濟と結びついて、その方面からの援助を得ようとしたのも、鈍重な彼の不手際では成功しなかつた。父親は返事さへしなくなつてきた。編集室も室代不拂ひで、つひには家主から追立てを喰ふにいたつた。この局面を切抜けるため、ラカドは數々の恐喝手段にまで訴へるやうになつた。そして、最後には、友人の一人と共謀し、知人の富める一婦人を夜の路上に襲撃し、その金銀装具寶石衣服所持金を奪はんとし、結局これを殺害してしまつた。

女の身のまはりの品々を一部賣拂つて、ラカドは一八〇〇フランを入手した。これで、編集室の滞納部屋代の二ヶ月分は支拂へて一息ついた。

ところで、この殺人事件の直後しばらくは容易に犯人の目星がつかなかつた。當局は次第に捜査の範圍をひろげた。その中、或る文書に關して、参考人としてラカドも豫審判事に喚問されることになつた。もちろん、容疑者としてではなく、全くの参考人としてであつた。ラカドは出頭の當日、不覺にも波立つ胸をおさへ、大いに平靜にならうと努めた。この頑丈不屈な男が、圖太く切抜ける決心をしたことは言ふまでもない。

ラカドは出頭してから、判事の室に入るまでに随分と待たされた。彼の氣持はいら／＼してきた。しかし、つひに

呼入れられた。判事に陳述を求められたが、きかれた事項には比較的すら／＼と答へることができた。判事は格別に何の疑念も生じてなかつた。陳述が終り、判事は「ラカド君、もう用はない。御苦勞でした。引き下つてよろしい。」と言ひ放つた。ラカドはほつとした気分になり退出しようとした。彼が室を出ようとした時、それを見送つてゐた判事が何の氣もなく言つた。「おや、ラカド君、君はあごひげをそり落したね。」と。

ラカドは狼狽した。彼の恐怖的空想は千里を走つて、その一寸した小細工の發覺が、彼の全犯罪を見破られたかのような衝撃を生じたのである。心内の急な激動を制し得ないで、さすがのこの男も失神しかけ、危く倒れさうになつた。聲をかけた判事も、意外の結果におどろいて驅け寄つた。次に、判事は決然と宣言した。「ラカドを拘留する」と。ラカドは自制を失ひ、哀願し、泣き、わめき、叫び、幾度か額の汗をぬぐひ、抗辯した。しかし、もうどうわめいてみても聞き入れられないことが判ると、こゝ數日の心勞でやゝ面やつれたこの男は、すさまじい形相となり、怒號し、あばれはじめた。それでも、彼はつひに取りおさへられ、留置された。

かの不幸な女は無抵抗に殺されたごとくなるも、その怨念が眼に見えぬ絲を引いて、つひにラカドを司直の手に引渡す神祕な働きをしたのかも知れない。

取調べの結果、ラカドの犯罪は確認された。證據も數々上がった。そして、間もなく、彼は裁きを受けて、處刑されることになつた。

この破局を眺めた友人たちは、當然ロレーヌ州の土に根を下ろすべき人物をすらも、花の都に引つぱりだし、このやうな悲劇に終らせた責任の所在を瞑想する。これが小説の概要である。

言ふまでもなく、この物語りは學徒全般に妥當するものではない。そしてまた、このデラシネも、今では餘り多く讀まれてゐるとは言へない。さらにまた、今日では、このバレスのやうな主張は一次二次大戰の記憶とともに遠くへ押流されてしまつて、振りかへらうとする人も少い。しかし、この作品の歴史的意味は消えることがない。世紀末の

フランスの青年たちは、モーリス・バレスと同じやうな精神的旋回をとげて歩んだ者が多かつたと言はれてゐる。すくなくとも、デラシネといふ奇警な題名だけは、永く文學史に残つて消えることがないであらうと思ふ。

このデラシネといふ題名については、ストロウスキーが次の興味ある消息を傳へてゐる。

「バレスがデラシネといふ一つの理念から發足してこの小説をつくつたのではないことは、バレス自身の口から聞いた。これは彼が主人公の活動を追つて描寫してゆく中に、後になつて生じた題名である。バレスは原稿を書き終へた時、まだ題名を見つけてなかつたので、その作品を読みかへしてみた。そして、どのページにもデラシネ（根こぎにする）の字がでてきてゐるのに氣づいた。そこで、バレスは丹念に各ページからこの字を消して、他の表現に置きかへた。そして、題名にのみ、このデラシネの字を選んだのであつた。」と。筆者の解説には、このやうな器用な藝當のできなかったことを、いささか心残りとしてこの紹介を終りたい。